



ジェイルハウスの怪物 かいぶつ

ノプロフス
noprops / 原作

くらたけんじ
黒田研二 / 著

すずらぎ
鈴羅木かりん / イラスト





目次

- | | | |
|-------|--------------|-----|
| 1 | ひとりぼっちの夕暮れ | 004 |
| 2 | おいしそうなハンバーガー | 010 |
| 3 | ジェイルハウスのうわさ | 019 |
| 4 | うわさの真相 | 031 |
| 5 | 星の降る夜 | 042 |
| 6 | ゲームの始まり | 057 |
| 7 | 危険なおい | 067 |
| 8 | ゆるるクローゼット | 074 |
| 9 | クローゼットの中で | 083 |
| 10 | ゲームオーバー | 090 |
| 11 | 青い影 | 096 |
| <hr/> | | |
| 12 | 進むべき道 | 106 |
| 13 | ベッドのかげで | 116 |
| 14 | ジェイルハウスの怪物 | 124 |
| 15 | 卓郎君との再会 | 132 |
| 16 | 赤い玉 | 141 |
| 17 | 青い玉 | 153 |
| 18 | 最後のとびら | 161 |
| 19 | ジェイルハウスからの脱出 | 169 |
| 20 | 星に願いを | 183 |
| | ひろしによるなぞの解説 | 190 |
| | ジェイルハウスの見取り図 | 191 |

1 ひとりぼっちの夕暮れ

窓から射しこんだまぶしい西陽で、ぼくは目を覚ました。

いつの間にかねむってしまつたらしい。

大きくノビをして立ち上がる。昼間に遊びすぎたせいか、まだ少しからだが重く、頭もぼんやりしていた。

部屋の中はクーラーをつけているのに、ずいぶんと暑い。のどがカラカラだ。

台所で水を飲むと、ようやく頭がさえてきた。

……お父さんは？

あたりを見回す。

とつくに帰つていてもいい時間なのに、お父さんの気配はまったく感じられない。

ベッドルームもお父さんの部屋もがらんと静まり返つたままだ。おふろやトイレまで探したが、お父さんはどこにもいなかった。

ゴム風船をふくらませるみたいに、不安な気持ちむくむくと大きくなり始める。

お父さんはとても几帳面な性格だ。時間に対してはとことんうるさく、予定どおりに物事が進まないと落ち着かなくなることが多い。

朝起きる時間もごはんの時間も仕事に出かける時間もおどろくくらいきつちりしていて、これまでほとんどずれたことがなかった。

仕事がいそがしすぎて、帰りがおそくなることもたまにはあるけれど、今日にかぎってそれは考えられない。

八月十三日。今日はお父さんの誕生日だ。

誕生日には必ず家族そろってケーキを食べる——それがぼくの家の昔からのならわしだった。どれだけいそがしくても、今日だけはとちゅうで仕事を切り上げて帰ってきてくれるはずだ。

それなのに……一体、どうしたんだろう？

ケーキを選ぶのに時間がかかっているんだろうか？

まさか、交通事故にあつたなんてことは……。

このまま家の中でおとなしくしていたら、イヤな想像ばかりがふくらんでしまう。ぼくは居ても立ってもいられなくなり、庭に飛び出した。

コンクリートの焼けるにおいがした。このにおいをかぐと、いつも鼻の奥がツンと痛くなり、

くしやみが止まらなくなる。

むずむずする鼻を気にしながら、空を見上げた。暑苦しい空気がぼくのからだにしつこくつきまとう。夕方だというのに、真夏の暑さはまだまだおさまりそうにない。呼吸をすることさえひと苦労だ。

庭のすみに植えられた、お父さんの身長よりも大きなひまわりに目をやる。

いつもは空を見上げて自分の大きさをひけらかしているひまわりが、今はなぜかしょんぼりうなだれたままだ。

もしかしたら、ひまわりもお父さんのことを心配しているのだろうか？

あまりの暑さに、頭の先がジンとしびれた。ただ立っているだけでもへこたれそうになる。

ぼくはフェンスに寄りかかり、夕陽に向かってまっすぐのびる一本道を見た。

お父さんは毎日、その道を歩いて帰ってくる。ここからお父さんに向かって大声でお帰りとさげぶことがぼくの日課だ。

ぼくの姿を確認すると、お父さんにはっこり笑って手をふってくれる。



お父さんの手はひまわりの花に負けないくらい大きい。深いしわのきざまれた男らしい手のひらを見るのが、ぼくは大好きだった。

背のびをしてフェンスの上に顔を出す。

ゆだんすると気が遠くなりそうな暑さをガマンしながら、今か今かとお父さんの帰りを待った。でも、お父さんはいつまで経っても現れない。

次第に西の空が赤く染まり始める。

まだ、お父さんの姿は見えない。

胸のあたりがチクチクと痛んだ。不安がぐるぐるとうずを巻きながら、おなかの底のほうへとしずんでいく。

以前にもこのような感覚を味わったことがある。胸さわぎというヤツだ。そして悲しいことに、ぼくの胸さわぎはたいいてい当たる。

お父さんがケガをして帰ってきたときも、お母さんがこの家からいなくなったときも、ぼくはこの気持ち悪い胸の痛みを感じたのだった。

イヤだ。

ぼくは頭を乱暴にふり、最悪すぎる妄想をふりはらった。

お父さんがいなくなつたら、ぼくはひとりぼっちだ。そんなのは絶対にたえられない。

……大丈夫。きつと大丈夫だ。

必死で自分にいきかせる。そうしないと、どうにかなつてしまひそうだった。

ぼくの胸さわぎも、たまにははずれる。昔、急におなかの奥のほうがどんよりと重くなり、なにかよくないことが起こるんじゃないかと心配したことがあつたけれど、結局それはおなかをこわしただけだった。

今日もたぶんそれと同じだ。今朝、少し食べ過ぎたのかもしれない。きつとそうに決まつてい

る。
食べもののことを考えていたら、急におなかが減つてきた。お父さんのことが心配でたまらなくて、おなかはいつもどおりに減るらしい。

タイミンクよく、となりの家からおいしそうな肉じゃがの香りがただよつてきた。晩ごはんの準備をしているのだろう。おなかがキュルルと情けない音を立てる。

早くお父さんの作つたごはんを食べたいなあ。

ぼんやりとそんなふう考えたことを、ぼくは反省した。

最近のお父さんはいつも、つかれた顔をしている。きつと仕事がいそがしいのだろう。どうし

でも今日中に終わらせなくてはならない作業があつて、だからなかなか帰ることができずにいるのだ。だったら、せめて家ではゆつくり休ませてあげたい。

ぼくはいつもお父さんにあまえてばかりだ。ぼくだつてもう子供じやない。お父さんにめいわくがかからないように、自分でできることはどんどんとやつていかなければ。

そうだ。お父さんのために晩ごはんを買つてこよう。

駅前のお弁当屋に売っている唐揚げ弁当がお父さんは大好きだ。お父さんのために用意しておいたら、きつと喜んでくれるにちがいない。

お父さんのおどろく顔を想像するとワクワクした。そうと決まれば、早く行動に移したほうがいい。お父さんが帰つてくる前に、準備してしまおう。

ぼくはフェンスをよじ登ると、庭の外に飛び出した。

そのまま一本道を全速力でかけぬける。

とちゆう、いつもうちに新聞を配達してくれるキンパツのお兄さんとすれちがった。

「あ——タケル。どこへ行くんだ？」

お兄さんはぼくの名前を呼んだが、ゴメン急いでいるからとぼくは答えると、駅に向かつてひたすら走り続けた。

2 おいしそうなハンバーガー

つかれて帰ってきたお父さんのためにおいしい晩ごはんを用意しておく。

サイコーに思えたアイデアは、いつものお弁当屋がお休みだったことで、サイテーな結末をむかえた。

ここまで全力で走ってきたうえに、その行動がすべてムダだったことを知ってがっかりし、ぼくはフラフラになっていった。おなかもペコペコで、もはやまっすぐ歩くことさえできない。

べつのお店を探すこともちよつとは考えたのだが、すぐにあきらめた。お弁当屋のおじさんはぼくのことをよく知っていて、だからぼくも気軽にしゃべりかけることができるけど、それ以外のお店にはこれまで一度も立ち寄ったことがない。

初めての場所は緊張する。お父さんがいなかったらなおさらだ。

ぼくがひとりきりで訪ねたりしたら、きつとみんな変な顔をするだろう。

君ひとりなの？ おうちはどこ？ もしかして迷子になったのかな？

質問ぜめにあうに決まっている。その質問にはきはきと答えられればまだいいが、ぼくのから

だはガチガチに固まり、きつと無口になつてしまふだろう。

ぼくはごはんを買ふことをあきらめ、うちにもどることにした。

もしお父さんが先に帰つてきて、家の中にぼくがいないと知つたら、ものすごく心配するにちがいない。仕事につかれて帰つてきたお父さんを困らせるなんて、そんなことは絶対にしたくなかつた。

来た道をもどろうと向きを変えたところで、南風によつておいしそうなにおいがただよつてきた。

なんのにおいだろう？

ときどき自分でもはずかしくなるが、とにかくぼくは食い意地が張つている。お父さんにも、おまえは本当に食いしんぼうだな、とたびたびいわれることがあつた。

おいしいものを目の前にしてよだれをすすりあげたり、無我夢中であつたりするのがよくないことはわかつてゐる。そんなことではお父さんみたいなカッコいい大人にはなれない。だからぼくはいつもお父さんの真似をし、落ち着いて物静かに食事をするよう心がけてゐる。

だけど、こんなにおなかがすいていては、もうどうしようもない。猫がまたたびに吸い寄せられるように、ふらふらとにおいのする方向へ歩いていく。

大通りをそれて、ぼくは細い路地へと入りこんだ。

大通りを歩いているときは、たくさんの街灯や店の明かりに照らされて気づかなかつたが、いつの間にか町は夜の闇にすつぽりと包まれていた。

街灯がないので、あたりは真つ暗だ。月の光が降り注いでいなければ、ほとんどなにも見えなかつただろう。

暗いところはクライじやない。頭の前まで布団にくるまり、うす暗いところでぼんやりといろいろなことを考えるのがぼくは好きだつた。

だけど今、目の前に存在する闇は、それとは少しちがつている。ぼくのからだの内側にまで入りこんできそうでなんだかこわい。こんな時間にひとりきりで出歩いたことなんて一度もなかつたので、背中あたりが寒くなつた。

引き返そうかとも思つたが、闇の向こう側からただよつてくるおいしそうなおいしいの正体も気になる。

ほんのちよつとだけ考えこみ、結局ぼくはそのまま路地を早足で進むことにした。

足もとのアスファルトはところどころひびが入つて、とても歩きにくい。何度もつまずきそうになり、そのたびにおなかがグウと鳴つた。

顔を上げると、路地の左側には、空の半分ほどをおおいつくすのではないかと思えるほどの巨大な鉄の球が見えた。月の光を反射して不気味な色にかがやいている。

その周りをとり囲むように、高いえんとつが何本も立っていた。えんとつからはき出される黒いけむりは、天高くのぼった月にまで届きそう、ちよつと気の毒に思えた。三日月の形は、背中を丸めてせきこむ人のようにも見える。

鼻の奥がヒリヒリと焼けつく。鉄の球からは、ぼくをひどく不安にさせる灰色のにおいが放たれていた。闇の向こうからただよってくるおいしそうなにおいが台無しだ。ぼくは先を急いだ。

巨大な鉄の球の向かい側——路地の右手は石の壁でおおわれている。壁の高さはぼくの背たけの十倍以上あり、その向こうになにがあるのかはまったくわからない。壁はどこまでも続いていた。

しばらく進むと、闇の中にぼんやりとした人影が現れた。

おいしそうなにおいはそこからただよってくるみたいだ。自然とぼくの足どりは速くなった。

高い石壁にもたれかかつて、男の子がハンバーガーを食べている。近づくと、とろけたチーズの香りが混ざっていることに気がついた。

これまで聞いたことのないような大きな音が、おなかから鳴りひびく。男の子もその音に気づ

いたらしい。おどろいた顔でこちらをふり返った。

「……なんだ、おどかさなよ」

ぼくと目が合ったとたん、それまでひきつっていた男の子の表情がおだやかになった。右手で胸をなでながら、ほっとしたみたいに小さく息をはく。

あの……。

ぼくは急にはずかしくなった。おいにさそわれてここまで来てしまったけれど、さて、このあとどうすればいいのだろうか？ 男の子が左手に持ったハンパーカーはとも魅力的だ。だけ

ど、初めて会った子にいきなり、それちようだいなんて図々しいことをいえるはずもない。

言葉が見つからず、ぼくはその場に無言のままたずむしかなかった。男の子はふしぎそうにこちらを見つけている。

いけない。なにかしやべらなくちや、変な子だと思われてしまう。

あわてて口を開いたが、なにをしやべっていいのかわからない。言葉の代わりに、またもやおなかが情けない音を立てた。

「なんだ、腹が減ってるのか？」

男の子はうれしそうに笑った。

「オレの食いかけだけど、いっしょに食うか？」

ぼくはためらった。

知らない人から食べものをめぐんでもらうなんて、たぶんすごくはしたないことだ。お父さんが知ったら、きつとおこるだろう。でも、だからといって、首を横にふることなんて絶対にできそうにない。

いつまでもぼくが返答しないので、男の子はなにかかんちがいしたらしい。

「心配すんな。おまえのキレイなものが入っていないから」

そういつて、ハンバーガーを真ん中からふたつに分けた。

「オレもタマネギは大キライだからさ、いつも



店みせの人ひとにお願ねがいしてぬいてもらつてるんだ」

あれ？

首くびをひねる。男おとこの子このいうとおり、ぼくはタマネギが苦にが手てだ。でもどうして、初はじめて会あつた男おとこの子こがそのことを知しっているのだろう？

「おれ、大きいほうを食くつていいぞ」

不思議ふしぎだったが、今いまはそんなことより食たべものだ。男おとこの子こがくれたハンバーガーを、ぼくはあつという間まに食たべつくしてしまった。あまい肉にく汁じゅうが口くちの中なかいつぱいに広ひろがる。

お肉にくは大好だいこう物ぶつだ。その気きになれば、どれだけだつて食たべられるだろう。さすが肉にくの日ひに生うまれただけのことはあるなあ、とお父とうさんにはよくからかわれるが、おいしいんだから仕し方かたがない。

おいしいものはつかれたからだを元げん氣きにしてくれる。ほんの少すこししかないハンバーガーだったけれど、それでもからだじゆうにパワがーがみなぎってくるのがわかつた。

どうもありがとう。

男おとこの子こにお礼れいの言こと葉はを伝つたえる。

「おまえ、ひとりなのか？」

最後のひとときれを口くちにおしこむと、男おとこの子こはもごもごと口くちを動うごかしながらいった。

「こんな時間に子供がひとりで出歩いてたら危ないぞ」

それはおたがいさまだろう。

君こそ、こんな時間にひとりきりでなにをしていたんだよ？

ここから見えるのは巨大な鉄の球とえんとつだけ。ひと休みしてハンバーガーを食べる場所とは思えない。

「オレはさ……父ちゃんにたのまれて、駅前のスーパーまで買い物に行ってたんだ」

ぼくの思っていることがわかったのか、足もとに置かれたビニールぶくろを見下ろし、男の子は答えた。

「オレんち、食堂をやってるんだ。うちの父ちゃん、おいしいものを作るウデはだれにも負けな
いんだけど、ちよつとヌケたところがあつてさ。うっかりサラダ油を切らしちまったことに、つ
いさつき気がついて」

口のはしについたケチャップをべろりとなめ、さらに続ける。

「いつもなら知り合いの酒屋さんに電話して届けてもらうんだけど、運の悪いことにたまたまそ
のお店が定休日でさ。だから、あわててオレがスーパーへ走つたと——まあ、そういうことだ」

ぼくが質問したわけでもないのに、男の子はずいぶんとおしゃべりだった。こういつたら申し

訳ないけれど、どうでもいいことを早口で話し続けている。

もうあまり覚えていないけれど、ぼくのお母さんもこんな感じだった。昨日買ったばかりのリンゴが傷んでいたとか、最近ゴミ収集所の周りにカラスが増えたとか、となりのお婆さんの化粧が派手になったとか、そんな話をとりとめなくぼくに語ってくれたことを、うつつらと思いつす。

男の子はしゃべりながら、ときどきちらちらと路地の先へ視線を送った。ぼくもそちらを見たが、暗くてよくわからない。なにか気になることでもあるのだろうか？

「おまえ、このへんでは見かけない顔だけど、どこに住んでるんだ？ 名前は？」
男の子の問いかけに、ぼくは正直に答えた。

「……ん？ ああ、タケルっていうのか？」

ぼくに顔を近づけ、男の子はいった。

「オレはたけし。ちよつと似てるな」

タケルとたけし。

確かに似ている。

なんだかうれしくなり、ぼくはたけし君に向かってにつこりとほほえんだ。

3 ジェイルハウスのうわさ

「いけね。早く店にもどらなくちや、父ちゃんにおこられちまう」

左手首に巻いた腕時計を見て、たけし君は裏がえった声を出した。

どうして、こんなところで立ち止まってハンバーガーを食べていたの？

疑問に思ったことを、ぼくは率直にたずねてみた。ハンバーガーなら歩きながらでも食べられたはずだ。わざわざこんなところで立ち止まる理由なんてなにもない。

「タケルんちはどつちだ？」

ぼくの質問には答えず、たけし君は鼻の下をかきながらためらいがちに口を開いた。
こつちだけど。

ぼくは路地を歩き始めた。ハンバーガーの誘惑にたえられず、思わぬ道草をくってしまった。
ぼくも早くうちに帰らなければ。

「おい、待てよ。ひとりで行くなつてば」

たけし君があわてた様子で後ろから追いかけてくる。

「ここでお前まえに出で会あえてよかつたよ」

ぼくの真横まよこにびたりと寄りよりそい、たけし君くんはいった。ずいふんと距離きょりが近いちかい。歩きあるにくかつたのでぼくのほうから少すこしはなれたが、それでもしつこくからだを寄よせてくる。

なんなんだ、一体いったい？

暑苦あつくるしくてうつとうしいと思おもつたけれど、ハンバーガーをもらつた手前てまえ、そんな言葉ことばは口くちできない。ぼくはだまつて先さきを急いそいだ。

「知しつてるか、ここ？」

たけし君くんがぼくの肩かたをつついた。いきなりだったので、おどろいてからだをふるわせる。

やめてよ、びつくりするじゃないか。

そういつてにらみつけたが、たけし君くんの視線しせんはぼくのはるか後方こうほうに注そそがれていた。

そのひとみが落ち着おきなく左右さゆうにゆれる。こめかみにあせが伝つたうのがわかつた。息づかいもあらい。よく見みると、腕うでにトリハダが立たつている。どうやら、目の前まえのなにかにおびえているらしい。

なにがあるつていうんだらう？

首くびを曲まげ、たけし君くんの視線しせんの先さきを追おいかける。

路地ろじぞいの高い壁たかがとぎれたところに、アーチ型の鉄門がたが設置てつもんされていた。門もんの向むこうには立りつ

派なお屋敷が見える。

「知ってるか、ここ？」

たけし君がもう一度、同じ言葉をくり返す。

「ジェイルハウスっていうんだぜ」

「じえいる……はうす？」

口の中で唱えてみる。聞いたことのない言葉だった。

「ここ、化け物屋敷なんだ。一度入ったら、二度と出てこれないらしい。三年前、化け物を退治してやるという屋敷の中にしのびこんだ中学生がいたそうだけど、そのまま帰ってこなかったんだとさ」

たけし君の声はふるえていた。ぼくの肩をつかんだまま、はなそうとしない。そんな姿を見て、ぼくはようやく理解した。

たけし君はこの屋敷に出るといって怪物がこわいのだ。スーパーへ出かけるときは明るかったの



でまだガマンできたが、帰るときにはすっかり暗くなり、だから門のまえをひとりでも通りぬけられなかつたんじゃないのかな？ ハンパーガーを食べながら、だれかが通りかかるのをひたすら待ち続けていたんだろう。

なるほど。だから、たけし君は出会ったときからずっと、どうでもいいことまでべらべらとしゃべり続けていたのだ。そうやって、恐怖をまぎらわせていたにちがいない。

たけし君にはハンパーガーの恩があるし、自分よりも全然小さいぼくをたよりにしてくれているのだから、力になってあげたいと思つた。

化け物なんてただのうわさだよ。こわがることなんてないさ。

たけし君をばげまそうと口を開いたそのとき、どこからともなく現れた白いもじやもじやとしたものが、ぼくとたけし君の間をものすごいスピードですりぬけていった。

「うあああああつ！」

たけし君が悲鳴をあげて飛び上がる。その大声にぼくはおどろいてしまった。

「ま、まさか、ば、ば、ば、化け物？」

たけし君は目を大きく見開き、鼻水を垂らしながらがくとふるえている。その顔のほうがよくよつぽどこわい。

たけし君をこわがらせた怪物は、鉄門のすきまを器用にくぐりぬけると、立ち止まってこちらをふり返った。全身の毛を逆立て、敵意をむきだしにしてうなり声をあげる。

それは丸々と太ったペルシヤ猫だった。大切に育ててもらっているらしく、ずいぶんと毛並みがいい。猫は門を通りぬけられないぼくたちをあざ笑うかのように、ニャアと高音で鳴き、そのまま尻を向けて、屋敷のほうへと消えていった。

「……なんだ、猫かよ。おどかしやがつて」

たけし君はアスファルトの上に尻もちをついた状態で、泣き笑いの表情をうかべている。ショートパンツについた砂ぼこりをはらって立ち上がるうとしたが、ひざがふるえているのか、うまくいかないらしい。

大丈夫？ とたずねると、

「べつに腰がぬけたわけじゃないからな」

たけし君は口をとがらせて答えた。

……そうか、腰がぬけたのか。

なんとかして助けてやりたいけど、ぼくの力ではたけし君をかかえ上げることなんてできそうにない。どうし



ようかとあたりを見回す。ほとんど人が通ることのないさびれた路地だ。助けを呼ぼうと思つたら大通りまで出なければならぬ。

このまま放つておくわけにはいかない。だれか大人の人を呼んでこようと思ひ、ひざを曲げたそのとき、ぼくの耳にかすかな足音が聞こえた。

だれかがこちらに近づいてくる。ちよつと待つてとたけし君に告げて、ぼくは音のするほうへと走つた。

「……ハート？」

暗闇の中から女の子の音が聞こえた。

ハート？ なんのことだろう？

さらに近づくと、月明かりに照らされてふたつの人影がぼんやりとうかび上がった。たけし君より、もう少し大人びた感じがする男の子と女の子だ。

男の子はすわりと背が高く、顔立ちも整つていて、どことなくぼくのお父さんに雰囲気似ていた。目つきがするどく、ぱつと見た感じはちよつとこわそうなところもそっくりだ。

彼に寄りそうもうひとりが、期待に満ちた表情をこちらに向けた。ツインテールがよく似合う活発そうな女の子だ。



「ちがう……ハートじゃなかった」

ぼくを見た^みとたん、女の子^{おんなこ}はがつくりと肩^{かた}を落^おとし、大きな^{おお}ため息^{いき}をはき出^だした。事情^{じじょう}はなに
ひとつわからないけれど、ぼくが落^おちこませてしまった^まみたいで、なんだか申^{もう}し訳^{わけ}なく感^{かん}じる。

「ねえ、ハートを見かけなかった？」

女の子はぼくに近づき、そういった。パニラのアイスクリームに似たあまい香りが、からだからほのかにただよってくる。

……ハートつて？

首をかしげてたずねると、

「君に似た真つ白な子猫んだけど」

女の子はそういった。ぼくはからだ小さいし、確かに色も白いけれど、子猫に似てるといわれてもあまりうれしくない。

え……白い子猫？

もしかして、さつき鉄門の向こう側へ消えていった猫のことだろうか？

「白い猫なら、ジェイルハウスのほうに行つちまったぞ」

ぼくが答えるより早く、背後からたけし君の声が聞こえた。たけし君は壁に寄りかかり、ふらふらと頭をゆらしながらもなんとか立っている。

「え？ ジェイルハウスへ？」

たけし君の言葉に、女の子の顔色が変わるのがわかった。たぶん彼女も、この屋敷に出るとい

う怪物の話を信じているのだろう。

「そんな……よりによってジェイルハウスだなんて……」

女の子はまゆげのはしっこを下げて、困ったような顔をとなりの男の子に向けた。

「まったく……あいつはおまえに似て、ちよろちよろすばしっこいから困る」

くちびるを曲げ、目つきのするどい男の子がいう。

「どうする、みか？」

「たたくろう、決まってるでしょ。あたし、ハートを見つけたらまで引き返すつもりないから」

たたくろう……みか……どうやら、それがふたりの名前らしい。

みか——そのひびきに、胸がきゅんと苦しくなった。ぼくのお母さんの名前はミソカだ。

みかとミソカ。タケルとたけしみたいなのに、ちよつと似ている。

大晦日に生まれたからそう名づけられたらしい。いつも「みそつかす」とみんなにからかわれ

てイヤだったとお母さんはよく話していたが、ぼくはその名前のひびきが大好きだった。「みそ

つかす」というのがなんなのかは、いまだによくわかっていないのだけれども。

お父さんはお母さんのことを、いつも「みそちゃん」と呼んでいた。今でもときどき、ぼくの

前でお母さんの話をすることがある。

この映画、けっこうんする前にみそちゃんといっしよに観に行つたことがあつてさ。

これ、みそちゃんの好きな花だ。名前はなんだつたつけなあ？

お母さんについて話すとき、お父さんはいつも目を細め、笑っているのどこか悲しそうな表情を見せた。そのたびにぼくは、お父さんをなぐさめてあげたいと思うのだけれど、ぼくにできることなんてたかが知れていて、せいぜいお父さんのそばにびつたりと寄りそうくらいだった。

「じゃあ、行くぞ」

ほとんど記憶にないお母さんのことをぼんやり思い出しているうちに、たたくらうと呼ばれたお父さんにちよつとだけ雰囲気の似た男の子は、みかちゃんというお母さんに似た名前の女の子の腕を引つ張り、歩き始めた。

「え……行くつてどこへ？」

「決まつてるだろ。この中だ」

たけし君がたずねると、たたくらう君はさびついた鉄門を指差した。

「お、おい。ジヨーダンだろ？」

あいかわらず壁に寄りかかったままのたけし君が、目を大きく見開く。

「ここは一度入つたら二度と出られない化け物屋敷で——」

「そんなことはもちろん知ってるさ」

額に垂れたまえがみをかき上げ、たくろう君は答えた。

「知ってるなら、この中に入ろうなんて、そんなことは考えないほうが——」

「そんなのはただのうわさだ。化け物なんているわけねえだろ」

たけし君の言葉をさえぎり、たくろう君ははき捨てるようにいった。

「うわさじゃないよ。三年前、化け物を退治してやるっていうてこの中へ入っていった中学生が、

そのまま帰ってこなかったって……」

「その話なら、あたしも知ってる」

みかちやんが口をはさむ。

「もしその話が本当だとしたら、ますますハートのことを放つてはおけないでしょ？」

「悪いことはいわない。やめとけつて！」

つばを飛ばしながら、たけし君はさげんだ。

「この中に入ったら、ふたりとも化け物に食われちゃうぞ」

「化け物なんていねえよ」

「なんで、そんなことがわかるんだよ？ それに——」

たけし君は鉄門を指差し、早口で続けた。

「どうやって中に入るつもりさ？」

たけし君のいうとおりだった。鉄門には太いクサリが巻かれ、大きな南京錠ではずれないようにしてある。門は高く足場になるような場所もないからよじ登ることも無理だ。ハシゴでも持つてこない限り、向こう側に行くことはできそうにない。

さっきの猫みたいに柵の間をくぐりぬけることはできないだろうか？

この中で一番からだ小さいのはぼくだ。なんとかなるかもしれないと考え、鉄門のすきまに無理やり頭をおしこんでみた。

……頭すら入らない。

たとえ頭が入ったとしても、肩がつかえてしまう。

「おい、無茶するな。やめとけって」

たくろう君は笑いながら、ぼくの背中を軽くたたいた。

「そんなことしなくていい。今、門を開けてやるから」

そういうと、たくろう君はジーンズのポケットに手を入れ、カギのたくさんついたキーケースをとり出した。